

天皇問之曰、是何樹也、有一老夫曰、是樹者歷木也、嘗未僵之先、當朝日暉、則隱杵島山、當夕日暉、覆阿蘇山也、天皇曰、是樹者神木、故是國宜號御木國、

〔日本書紀<sup>十一</sup>〕六十二年五月、遠江國司表上言、自大樹、自大井河、流之、停于河曲、其大十圍、本一以末兩、時遣倭直吾子籠令造船、而自南海運之、將來于難波津、以充御船也、

〔大扶桑國考<sup>下</sup>〕今の世にも然る大木ありやと尋ぬるに、文化九年の事とか、紀伊國熊野山の奥三十里ばかりにて、大木の榎を伐出せるに、元木百二十抱、高さ三百二十間餘り、南北へ差たる枝十九抱あり、元木の木口三十四間四尺八寸なるを角にして廿五間ばかり有り、此木の寄生木高さ七間半餘の杉七本、その外六七間以下の諸木多く、松、栂、楓、椎、柏、柿、竹、南天なども寄りりとぞ、また熊野の山奥に大杉明神と祀へる木は、三十尋餘り有り、と云ふ、また陸奥國の郡は知らず、關村と云ふ所にも大杉明神として、三十三尋餘りの木ある由なるが、是等より大きな木の有り、と云ふとは未聞かず、其は大地のなほ大に成り行く間は、木もそれにつれて大樹となれるが、大地すでに成竟ては、大かた木の立延べき量の自然に定めりと見えて、右の大杉など、神世の大樹に比ては、小木なれど、今しも斯ばかりの木さへに多くは聞えずぞ有りける、然れど、飛彈國高山の邊に異木ありて、枝も葉もみな三に爰れし樹なるが、其蔭一里ばかりを蔽ひて、今も立榮えありと云へる人あり、また信濃國戸隠山の奥深き所に、一本にして二三里の間にはひ蟠れる松木あり、冬より春に至り五丈餘も雪ふる所なる故に、壓れて直立すること能はず、地につきて低ければ昔より其幹木を見し人なしと云ふことも聞たり、此等の大樹どもの事、なを其國々の人に委く問ねて、實否を知らまほしき事なり、

〔傍廂<sup>前篇</sup>〕箒木。

坂上是則歌に、そのはらやふせやにおふる箒木のありとはみえてあはぬ君かな、此歌によりて、